
G.O.F.～花言葉をあなたに～

廻詠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G・O・F・〜花言葉をあなたに〜

【Nコード】

N8156J

【作者名】

麵誂

【あらすじ】

25歳の会社員、喜美川庸介は、G・O・F.と呼ばれる外見は女の子そっくりなアンドロイドを下宿させる、といった副業を始めた。

だが、喜美川庸介の元には、下宿するアンドロイドが決まった、といった連絡がいつまでたっても来ず、半ば諦めかけていた庸介のもとに謎の来客が……。そしてG・O・F.とは一体……？

プロローグ（前書き）

更新スピードがとても遅いです。駄文ばかりです。それでも良いと言って頂けるなら作者冥利につきます。

よろしかったら、仕方ないからコメントしてやるか、程度でいいのでコメントも頂けたら幸いです。

プロローグ

「留守電はまた無し、か」

俺も早く、可愛い女の子と暮らしたいのだ。可愛い女の子、などと言ってしまおうと何だか危ない奴のようだが、これも一つの副業みたいなものである。

その副業とは、詳しくは知らないがG・O・F.と呼ばれる女の子を家に下宿させ、毎月謝礼金を貰える、と言った独身男性には夢のような話なのだ。このアパートでは、少し狭いかもしれないが。それに、女の子の「中身」は機械だから何にも問題は無い。アンドロイドらしいが、やや残念だ。

今日も結局仕事から帰って、後は寝るだけか。パジャマは何処にやったかな。

俺は長年使い込み、くたびれたパジャマに着替え、寢床に向かった矢先のことである。

玄関のチャイムが鳴った。

「こんな時間に……?」

多少疑問を抱きながら、しぶしぶ玄関のドアを開ける。

そこには、旅行カバンを持った少女がいた。

謎の少女は、はにかみ小さく俺に会釈した。

第1話：自己紹介

「えーと、どちら様で？」

本当にどちら様なのか気になる。まさかこの少女がG・O・F.なのか？

「初めまして、私、『竜胆』りんどうと言います。以後お見知りおいてくださいね？」

何か文法が間違っているような気がするこの少女、俺が今一番気になっている事をぶつけてみた。違いますように。

「あの…、つかぬ事をお聞きますが」

「はあ？」口をポカンと開けている少女を見て、何処か愛らしさを感じたが、その感情は今だけ無視をする。

「あなた、いえ竜胆さん。もしかして」

「はい、私は立派なG・O・F.です。文句ありますか？」

どうやら俺はこのやや口が荒い少女と、当分過アンドロイドごすようだ。頭が痛くなってきた。もう少し大人っぽいのが来ると思っていたが、現実には厳しい。

「これからお世話になります。あ、あとこれ」

「へ？」

竜胆から手渡されたのは、何処にでも売ってそうな和菓子の包み。昨日これと似たようなのを会社で貰ったばかりだ。

正直、期待外れな予感がした。

「テレビ、大きいですね」

そう言って竜胆はテレビを見つめる。別に見つめてもチャンネルが自動で入る事はないのに。

「竜胆さん、お茶が入りましたよ」

「あ、お気遣い無く」

これから一緒に暮らすと言っているのに、このどこかこそばゆい喋り方はなんだ。

相手はアンドロイドであり、人間じゃないにも関わらず。

俺と竜胆はこたつに入り、対面する形で座っている。よく見たら本当に人間そっくりだ。肌の質感、髪の艶、しぐさまで機械とは思えないレベルだ。顔も、悔しいながら俺のタイプだったりするが、俺は大人の女性が好みなので、（推定）十五、六歳には興味はない。「竜胆さん、整備員の方は？」

俺はG・O・F. が家にやってくるとき、万が一に備えて整備員が引率すると、申請所の係に聞いた。

「ああ、何か私一人で大丈夫って言われたんで、つつい」

つつい、ではない。えへへ、と頭を掻いているが、受け入れる側としては、大いに不安であることに違いない。誤作動でも起こしたらどうするんだ。

「食事はいらないうでしたっけ？」

「いえいえ、私は食べますよ？ 私はちょっと特殊なもので、あなた方人間とほぼ同じ生活をしなければならんです。もちろん、趣味もありますし、おトイレ、睡眠もします」

俺はてっきり電源みたいな物からエネルギーを貰うのかと思いきや、俺と一緒に食事をするのだと？ 食費が馬鹿にならないだろう。

「……では趣味は？」

「ゲームです」

「好きな食べ物？」

「さつまいもの天ぷらです」

良い趣味をしている。俺も奇遇な事にゲーマーなのだ。ゲーム相手が増えて良かった。

好きな食べ物がさつまいもの天ぷらとは、また珍しい物が好きだなこのアンドロイドは。

「あ！ これ先週発売したゲームですよ？」

「ええ、まあ」

「ちょっとやらせて貰えませんか？」

本当に変わったアンドロイドなもんだ。俺はコントローラーを二つ、カゴから取り出した。これは俺なりの、新しい家族(?)が出来たお祝いであつた。どうやら予感の外れらしい。

まだまだ夜は長い。久しぶりに楽しい夜になりそうだ。

第2話…お約束

あれから一時間。こたつの上にはゲーム機とお決まりのみかん、それに和菓子が陣取り、その横で俺とアンドロイド少女の竜胆が、コントローラーをはじき続けている。

「ところで……、あつくそ、ずっと気になっていたんですが……」

「はい、あら」

「その……G・O・Fって何なんですか？」

竜胆は一瞬真顔になり、

「お手伝いさんです」

と即答した。お手伝いさん？　メイドアンドロイドか？

「家事とか？」

「……まあ。あ、負けた……」

ゲーム画面には俺が竜胆に勝利したことが知らされていた。

竜胆は俺をやや睨みつけて、

「貴方のせいですよ……」

そりやお門違いだ。

「そういえば貴方の名前を知らませんでしたね」

「え？　あらかじめインプットされてるのでは？」

「忘れちゃいました」

嘗めてるのかこの女、いやアンドロイドは。機械なんだから記

憶力は良くて当たり前じゃないのか？

「……喜美川庸介きみがわようすけです」

「へえ、良い名前ですね！」

ぱっと笑顔になる。本当に人間みたいだ。ゲームしている最中も何度か間違えそうになったくらいなのだ。

「そうそう」

竜胆は手のひらをポンと叩く。

「取り決め書を書かなきゃ」

「取り決め書？」

契約書ならもう書いたはずだが。

「はい、取り決め書というのは、簡単に言えば私と貴方のお約束、みたいなものです。おつかいは週何回行くのー？　とか、今日ゴミ捨ては誰ー？　みたいな」

こいつは良い家政婦がやってきた。さっき竜胆は自分を家政婦みたいなものだと、言っていたはずだ。

「じゃあ料理は、竜胆さんに任せても良いですか？」

「料理……！　料理、ですか……？」

何だか冷や汗（？）を掻いているのか知らないが、相当焦っているような気がする。

「苦手……とか？」

「ち、違います！　私は料理も趣味の一つです！　女の子ですから！」

別に女の子だから料理が得意などと、そういった固定観念は持ち合わせてはいないが、竜胆は今自分のことを「女の子」と言った。

機械なのにか？　正直言って違和感しかない。

「わかりました！　料理は朝、夜ともに私にお任せください！　あ、昼は私お仕事があるので、あしからずってことで」

「昼は僕も会社ですから」

竜胆はせっせと取り決め書なる紙に、決まった事柄を書いている。やはり、字を見る限りごく普通の女の子、といったところだ。多少まるっこい字は、会社で同僚の女性が書く書類で見慣れているが、竜胆が書くとなんだか感心してしまうのは何故か？

「あ、ちなみに竜胆さんは、週何日ぐらい仕事に行かれるんですか？」

竜胆の取り決め書を書く手が、ぴたりと止まった。

「んー……、大体、月、火、水の三日くらいですかね？」
ですかねって聞かれても、反応に困る。

「そうですね、そしたらその三日以外は部屋の掃除とかも任せちゃ

「つても良いですか？」

「ちよつと図々しいかな？」

「……私、お手伝いさんじゃないですよ？」

「でもさっき自分でお手伝いさんのような仕事してるって……」

「……………そうでした。良いですよ、でもその代わり、お土産は期待してますからね！」

「そんな要求を元氣一杯に言われても。」

「少しこき使い過ぎな気がするが、そこはお手伝いさんとして頑張ってもらいたい。」

「ちなみに、お土産はお菓子が良いようだ。」

第3話：疑問

朝、すずめのさえずりで目を覚まし、カーテンから少しだけ差し込む、金色を薄くしたような朝日が俺を優しく起こす。なんてのはただの妄想であり、現実は厳しい。

ニュース番組の軽快な音楽に起こされてしまった。ちなみにカーテンは完全に開いており、朝日は俺にあたり続けているので、どうやら朝日は目覚ましの効果を忘れたようだ。

昨夜は確か、新しい家族(?)の竜胆に家事を押し付けて、後はゲーム三昧、とまでは覚えている。そこから先の記憶はとももデリートされてしまったようだ。

「あ、庸介さん。おはようございます」

不意を突く竜胆の挨拶に俺は驚き、そして竜胆の姿を確認して俺の脳みそは完全に叩き起こされた。

花柄の黄色い三角頭巾、更にひよこのついた、またしても黄色いエプロン。

このコンボは、はつきり言っずるい。それがアンドロイドだとしてもだ。

俺の理想の女性はそこにいた。もう大人っぽい女性が好きななんて忘れた。

「お、おはようございます……」

俺の寝ぼけた挨拶を受けた竜胆は、もう一度小さく

「おはようございます」

と俺に笑顔で返した。

「すみません、勝手に台所を使わせて頂いています」

「いや、もう全然構わないですよはい」

良かった、と竜胆は微笑み、昨夜大活躍したこたつを一生懸命拭いている。

「今日の朝ごはんは、特製フレンチトーストですよ」

俺の好物だ。嬉しい。

「さあ、庸介さんが顔を洗ってきたら食べますよ？」
促されるまま俺は洗面所へ向かう。

やや汚い話だが、朝一番から顔を洗うのは久しぶりだ。竜胆との生活が、健康に繋がれば良いのだが。

「おまたせしました」

細かい事だが、洗面所のタオルもしっかり用意されていたのに、俺は少々感激してしまった。

「では、いただきます」

「いただきます」

ニュース番組をつけ、男女二人が朝ごはんを食べる。しかも二人（？）は若者同士。

まるで新婚ではないか。

確かに竜胆はアンドロイドだ。申請所の係に何度も説明を受けた。だが目の前の状況を見る限り、普通の人間にしか見えない。

例えば、今竜胆は何をしているか。フレンチトーストを頬張り、オレンジジュースを注いでいる。俺のもだ。

外見、仕草全てにおいて普通の人間だ。どこがアンドロイドなのか。

「庸介さん、この俳優さん捕まったらいいですよ……。好きだったのに」

世間話もしてくる。

「今日は美味しく出来たな……。へへ」

料理は日によって出来が違うらしい。ここもアンドロイドらしからぬ点だ。

「どうですか？ 美味しいですか？」
質問もしてくる。

「庸介さん！」

「……ああ、美味しいですよ」

「悩み事ですか？」

心配もしてくる。

どうせならこれを機に聞いてみるかな？

「あの、竜胆さん」

「何ですか？」

「あなたは本当に、その……アンドロイドなんですか？」

俺は大真面目のつもりだった。

「あははは！ 今頃なんですか？」

「いや、ですから」

俺の言葉を遮り、竜胆は微笑み答えた。

「確かに私は、人間、でしたよ？」

第4話：涙

開いた口が塞がらない、というのはまさに今使う慣用句か。

「人間……だった？」

「はい、そうですよ？」

竜胆は、それがどうしたと言わんばかりに落ち着いている。俺にとってはこれ程まで衝撃的な発言は、今まで一回も聞いた事が無い。「どういう意味なんですか？」

「人間だった、という言葉の意味ですか？ そのまんまですよ」

俺のコップが空だったことに気づいた竜胆は、お代わりを注ぎはじめた。

「話……、聞きます？」

「はいっ……」

焦って呼吸音も同時に出そうになった。

「面白くないですよ？ あとあまり話さないでって、偉い人から言われてるんで、そこらへんはあしからずって事で」

「大丈夫です、お願いします」

竜胆は、子供に子守唄を聞かせるように、ゆっくり話し始めた。

「長くなりますが……。実は私が小さい頃に、両親が事故死してしまったんですよ。だから、子供の時からずっと施設で暮らしていました。その時に、ボランティアのおばさんに料理とか、家事全般のやり方を教えてもらったんです。

勉強とかは、普通に学校に通えましたが、授業参観の時に自分だけ親が来なくて……。いつも泣いていました。その度に、おばさんが私を励ましてくれました。

いつか、必ずあなたにも大切な家族が出来るよ、って。もちろん、おばさんもあなたの家族だからねって……。その言葉が何よりの励

みになりました。

高校生になった頃くらいかな？ 施設にスーツを着た男の人が、頻繁に出入りするようになりました。しかもその男の人は、おばさんといつも話をしていました。

疑問や不安が増えていくなか、ある日学校から帰ると、私は施設の面談室に呼ばれ、行ってみるとそこには、おばさんと男の人がいたんです。そして男の人は言いました。

新しい自分になる気はないか、と。

私は断りました。何度も、何度も何度も。それでも男の人は食いが下がつてきて、困っていたところにおばさんが一言。

何事も経験だよ、って言ったんです。

元々友達が少なかった私にとって、おばさんの存在が大きかったのもあり、話を聞くだけならと、おばさんと一緒に男の人の事務所に行ったんです。

事務所に着くと、男の人はコーヒーでも飲んで待ってて下さい、と言いついて奥の方へ入っていききました。

私はコーヒーが苦手なもので、飲まずにいたんですが、おばさんがミルクを入れると美味しいよ、って教えてくれたんで飲んでみたんです——」

話が終わったのかと思いきや、竜胆は急に鼻をすすった。

「……、す、すいません」

竜胆は、目頭の辺りを手首でこすっている。

目の前のアンドロイドが、泣き出した。

竜胆は、嗚咽混じりに、ゆっくりと、もう一度語りだした。

第5話：直感

「私はコーヒーを飲み終えた後、入り口の近くのトイレに行こうとしたんです。いざ立ち上がると、何だか、足が他人の物のような気がするというか、足が言う事を利かないんです。」

途端に頭が痛くなり、そのまま崩れ落ちるように私は、倒れてしまいました」

竜胆はオレンジジュースをぐっと飲み干し、一息ついた後、小さく呟いた。

「おばさんに騙されたんです、私」

そう言うと、また竜胆は手首で目頭を拭う。俺はかける言葉を躍起になって捜すが、適当な言葉が見つからない。

「気がついた時には、私は病院のベッドの上でした。その時には、もう私は私でなくなっていました。」

それから、偉い人に極秘と言われているんで詳しくは話せませんが、とにかく、私の身体はその病院で、アンドロイド化されてしまい、自分の身体は私の物であって、会社の物でもあるんです。

あと、ごめんなさい。私お手伝いさんの仕事をやってるって昨日言いましたが、本当は……、すいません、暫定極秘事項なので今は話せません。本当にごめんなさい。

庸介さん、あなたのご迷惑にはならないよう努力します、お料理もします、お洗濯もします。ですから、どうか私をこの家に置いてくれないでしょうか？」

竜胆はほとんど土下座に近い形で、俺に頼み続けた。涙でぐしゃぐしゃになった顔をもっとぐしゃぐしゃにして。

どうしてそこまで俺の家にこだわるのか。契約だからか？ それにしては思い入れが強い。

「竜胆さん、顔を上げてください」

だけど、この子に少しでも楽しい思いをさせてやりたい。

「え……」

「狭い家です。二人で暮らすには窮屈かもしれないです。家事全般、俺は苦手です。せいぜいゲームしか取り柄が無いです。」

それでも良かったら、僕と一緒に暮らしてください！」

なんだかプロポーズみたいだ。急に恥ずかしくなってきた。

「……ップ！ あははは！ 庸介さん、それじゃ結婚でもするみたいですよ？」

やっぱりか。

楽しそうに竜胆は笑う。ニコニコしながら、嬉しそうに笑っている姿を見て、俺は自分まで嬉しくなっているのに気がついた。

彼女には、人を幸せにする力がある、根拠は無いが、そんな気がするのだ。

「あ、そうだそうだ。今晚のご飯、何にします？」

竜胆は、メモを取り出し、俺に問いかける。

俺は、彼女のおかげで、何とか、アレを乗り越えられそうだ。不思議とそんな気になったのだ。

ありがとう、竜胆。

「そうですね……。鍋？ なんかはどうでしょう？」

竜胆が何の鍋にするか悩んでいる横で、ニュース番組は、午前十時を知らせていた。

第6話：修羅場

外はすっかり暖かくなった。横に目を移すと花屋の花壇には、名前はよくわからないが綺麗な花が咲き、春の訪れを感じさせてくれる。

「あら、庸介さん見てくださいよ、クンシランの花ですよ。可愛いですね」

今、俺達は竜胆の足りない生活用品、鍋の材料を買うため商店街付近を歩いているのだが、なるほど。可愛いという取り方もあったのか。

「あまり聞かない花ですね」

「クンシランはオレンジ色が多いんですが、黄色のクンシランもあるんですよ？　いつか育ててみたいです」

竜胆はニコニコしながら、クンシランの花びらを突つつく。

「さあ、行きましょうか」

「あ、待って待って！　この子買わせてください！」

俺は自分の財布を取り出そうとすると、

「いえ、自分のお金で買います！」

とだけ言い残し、クンシランの鉢を持って、店の中に入っていた。

三十秒ほど経っただろうか。竜胆は手ぶらで俺の元にやってきた。

「庸介さん……。お金貸してくれますか？」

財布を忘れたらしい。アンドロイドの欠片も無いな、こいつ。

「後で千円返します……」

大事そうに鉢を抱きかかえ、竜胆は言った。

「いや、良いんですよ。そのクンシランは俺からのプレゼントです」

「で、でも！」

竜胆は焦って切り返そうとしたが、俺はズバツと言いつつ切った。

「あなたの家族ですから」

言わなきゃ良かった。顔から火が出るどころか火炎放射だ。

「……！ ありがとうございます……」

竜胆の顔がみるみる赤くなっていく。感心するくらいよく出来るな。

「あと、一つだけお願い良いですか？」

「はいどうぞ」

「私を……、その、竜胆、って呼んで貰えますか？ あと敬語も無しで……」

俺の目を真っ直ぐ見つめ、竜胆は懇願した。

「お、俺は構いませんけど……。良いんですか？」

「はい、だって家族ですから！」

自信満々に竜胆は言い放つ。俺の台詞を真似しやがって。

「じゃ、じゃあ俺も呼び捨てで」

「もちろん！」

複雑極まりない。少しの抵抗も見せない奴だ。

「あ、でも庸介さん、って呼ぶの気に入ったのでそれは固定で」

「はあ」

花屋の前で急展開だ。そんないきなり敬語無しで呼び捨てなんて、やっぱり恥ずかしいものがあるだろう。

あれから、五分くらい歩いたのだが、お互い全く話さなくなった。春の日差しが妙に暑く感じられる。

「……り、りんどうは何か欲しい生活用品はある……かな？」

片言の様にしか話せない俺を許してくれ竜胆。

「ええ……と、あ……歯ブラシ？」

昨日マイ歯ブラシで歯を磨いていたのを忘れたのだろうか。片言だらけの落ち着かない雰囲気は、どうやらまだ続行のサインが出た。

「おおーい！ 喜美川ー！」

同僚の大橋が、こちらに向かって走ってくる。そりゃあ外出すれば知人にも会う。

あれ？ 俺、竜胆と一緒にじゃん。大橋は俺に彼女がいない事を知

っ
ていとすれば？

文字通り、修羅場となりそうだ。

第7話：謎の表情

プライベートで友人に会うのは、どちらかというと俺は好きなほうだ。そのまま行動を共にしたり、夕方に会えば何処かに飲みに行くのも楽しい。

そして今も、確かにプライベートであり、悪くはないが。そう、俺は悪くないのだが、いかんせん連れが連れなもので、当然大橋の目線は竜胆を向いている。

「ああーっと……、お邪魔だったかな？」

大橋が俺をチラリと見る。

「いや、全然大丈夫だよ、うん」

しどろもどろもいいところだ。

「……………！ 彼女さんかい？」

何だ今の間は。しかし、正直に答えるべきか、それとも嘘をつくべきか。

確かに近年新しくできた副業（アルバイト？）で、G・O・F. という女の子アンドロイドを下宿させる、といった内容は大橋なら知っているはずだ。だがこの妙に知られたくないような気持ちは何だ？

「ええーと、その」

「どうも、庸介さんとお付き合いしています、才田園香と申します。さいだそのかよろしく願います」

こいつ、偽名を使ったのか？ しかも、彼女だと？

「……………喜美川、お前俺に黙っていたな？ 男の約束を破るとは……………」

「いや、そんなつもりは」

「もう良い。これで会社でジュースを買う必要が無くなったな。それなら、園香さん、また会いましょう」

「はい、楽しみにしています」

それだけ言うと、大橋はゆっくりと去っていった。

「私……、まずい事言っちゃ……たかな？」

「まあ大丈夫だよ……」

これから毎日百二十円が俺の財布から旅立つ事を思うと、今から胸が痛む。約束なんてのは、ただお互い彼女が出来たら言い合おうと、子供みたいな事を昼休みに話してたのをふと思い出した。

「ごめんね庸介さん……」

竜胆がションボリした顔を見ると、心なしかクンシランも元気が無い感じだ。

「いやいや、良いんだよ別に。さあ、竜胆の生活用品を揃えるか」

良いぞ。敬語を使わない事に段々慣れてきた。

「うん！」

どうやらクンシランも元気を取り戻したようである。

今回俺たちがやって来たのは、最近出来た『フリージア』という大型スーパーである。生鮮食品からはたまた家電製品まで、普段の買い物をほとんどここフリージアですませる事が出来るので、会社帰りにたまに寄るのだ。お惣菜が安い。

「さあ、まずは何を買うんだ？」

返事が無い。というか隣にいるはずの竜胆がいない、と思えばまた花屋の前にいる。

どこまで花が好きなんだ？

「竜胆、あっちに」

勝手に口が止まった。

竜胆の表情が明らかに違うのだ。今までの柔和な表情からは、予想だにしない程の、殺気立った顔。

「り……、竜胆？」

声を搾り出すようにして、俺は呼び掛けた。

「――、あ、はい？」

竜胆はいつもの笑顔に戻った。逆にその変化が怖い。

「一体、花なんて見つめてどうしたんだ？」

「いえ、ちょっと考え事を。それより、私の歯ブラシが欲しいです！」

敬語になってるし。だから歯ブラシはあるっての。

「さあ、庸介さん、行きましょう」

竜胆に数歩遅れて、俺は歩き出す。

名札を見るとその花は、黒百合、というらしい。

第8話：日常へ

竜胆は生活用品コーナーで、歯ブラシを見ながら先程の表情とは、うってかわって明るく笑みをこぼしている。

「庸介さん、これなんか可愛いですね!」

敬語になっているし。

「だから歯ブラシは昨日自分のを持っていたじゃないですか」

あれ。つられて俺も敬語になった。まあ良いか。

そんな事よりも、俺はなぜ竜胆が花を見て、想像もつかない表情をしたのが、気になって仕方がない。ここは聞いて良いところなのか？ それとも、なか聞いているのではない秘密の部分なのか？

「あの……、竜胆さん?」

「何ですか庸介さん? 敬語は駄目ですよ? ……私もだ」

「――なんでもないです」

答えは、別に聞かなくても良い、という事に落ち着いた。

そりゃ竜胆だって元々人間なら、心がある。ならば、何かしら悩みを抱えてもおかしくはない。そこにズカズカ入り込んだら、それこそプライバシーの侵害というもんだ。

俺は竜胆に家族だと言ったが、家族間にも多少の秘密があったって別におかしくは無い、と俺は考える。

「それと、やっぱりお互い出会って間もないので、敬語も織り交ぜて良いことにしません?」

「え……、仲良くしないんですかあ……?」

泣きそうになる竜胆に補足する。

「違います、お互いが完全に慣れてきたら、敬語をやめよう、って意味ですよ。仲良くしたいに決まってるじゃないですか」

「そういうことなら良いですよ。ああびっくりした……」

ようやくこれで変な汗をかかなくて済む。ああ良かった、良かった。

結局俺は竜胆の気に入った、ひよこ柄の歯ブラシをカゴに入れ、生鮮食品コーナーへ向かった。ちなみに竜胆の生活用品は、全て持って来たらしいので、買ったものは歯ブラシだけとなる。

「良いお肉を買わないとなりませんね」

見分け方が分かるのか、パックされた豚肉を下から覗き込む。あまり意味が無いようにも思えるが、そこは指摘しないでおう。

「今日は何鍋にするんですか？」

「ふふん、今日はなんと水炊きです！」

いや、まあ普通の鍋だが。

竜胆の目に適ったらしい、五百円くらいの豚ばら肉を手渡されると、竜胆は具に付けるタレを探しに行った。

なんだろう、この妙な気分は。世話好きの女房を持った感じである。

「庸介さん、ポン酢は好きですか？」

好きですか、と聞きながらカゴに入れては、俺の意見を聞く気はあまり無いようだ。

「ええ、好きですよ」

買い物って、こんなに楽しいのか。初めて知った。一緒にいるのがアンドロイドだと思いつくと、ちよっぴり切ないというか、残念というか。

「どうしたんですか庸介さん？ ニヤニヤしてますよ？」

ちよっと引いた目で見える竜胆を横に、今日の晩酌の酒を選ぶ。

竜胆が注いでくれたら、良いのにな。

第9話：白菜

「それでは、第一回鍋大会を始めます！」

時間と場所が変わって、夜七時の自宅となる。買い物が終わり、その後近所のファミレスで食事をし、ようやく家に帰ったのが夕方五時。窓際には、竜胆が買った（買ってやった）クンシランが鎮座している。育て方知らんぞ、俺は。

「さあさあ、庸介さん。どんどん食べてくださいね」

竜胆は、ざく切りにされた白菜を、煮えたぎる鍋にどどつと投入すると、次はもやしに手をかけた。

「野菜が先なんですよね……」

俺はあまり鍋をしないので、よく分かんがまあ良いだろう。酒でも飲もうかな。

「あ！ 庸介さん、私が注ぎますよ！」

竜胆がニコニコしながらビールの缶を開ける。

「良いんですか？」

なんて言いながら、実は内心期待していたので、願ったり叶ったりといったところだ。

「では、行きますよ……」

注いでもらうのは嬉しいが、いかんせん竜胆の手つきが危なっかしいため、落ち着いて見てもらえない。

「おとと……」

多少はこぼれてしまったが、まあ合格といった感じだ。

「それじゃ、竜胆さん。乾杯でもしますか」

「しましうしましう！」

竜胆は未成年（関係あるのか？）らしく、彼女のコップにはコーラが注がれていた。

「それじゃ、乾杯！」

俺と竜胆は、グイと一杯目を勢い良く飲み干す。「さあさあ庸介

さん、もう一杯！」

さらに注がれた二杯目を飲み続ける俺を、嬉しそうに見つめる竜胆は、俺と自分の分の鍋の具を取り分けている。白菜は煮えたらしい。

「そうそう、私、明日から三日間仕事ですから。朝ご飯は作るとして、お昼はお弁当作りますか？」

お弁当。なんて素晴らしい響きなんだろう。最近コンビニで昼食を買う毎日なので、我が家の経済状況もゆっくりと悪化の一途をたどっている。

だが、今は違う。一つは、昨日めでたく竜胆を受け入れたことで、謝礼金が黙ってても入ってくる事。もう一つは、その竜胆が自分から俺の弁当を手作りしてくれるということだ。これで我が家の経済状況は、もう氷河期を迎えずに済みそうだ。

「でも、大変ではないですか？」 「いえ全然」

即答された。ならばここは一つ、お世話になっておこう。

「じゃあお願いします」

はい、と返事をする、と、竜胆は引き続き鍋奉行のようの職務へと戻った。

「いっぱい食べて、頑張ってお仕事してくださいね」

「わかりましたよ」

俺と竜胆の鍋大会はしばらく続いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8156j/>

G.O.F.～花言葉をあなたに～

2010年10月10日05時21分発行